（上段）
野口丈夫　山崎芳直　吉森耕路　高妻道直　大内須磨子　樋口みと　安達静子　古市三枝子　吉垣正男　井上文夫

（中段）
清原善太郎　長門莫　小田憲正　中津留光子　衛藤晴子　平村花子　滝山佐代　西村美代

（下段）
松井一雄　黒川文一　浜崎義雄　上尾クラ　菅一郎　御手洗禱　勝原見義　長門はる子

（敬称略）

中根貞彦歌集

古藤田太
（会員・弥生町江良）

九月も漸く終りとなる頃、海崎の松井家で話しているうち、たまたま中根貞彦先生の歌集のことを聞き、見せて貰うと、『帰去來』の中に上掲のような写真が入っている。当時の佐伯合同短歌会の写真である。昭和三十三年頃のものであろうか。そこには懐つかしい人々の顔がある。これらの人々が、佐伯の短歌界を育てた人々であると思うと置き難い思いがする。写真の中の大内須磨子先生は今日尚多くの後進の指導に当られておられる。

この歌集は、現在多くの人々に愛蔵されているであろうが、この写真と共に歌集の紹介を佐伯史談に残しておきたいと思い借本したものである。

○故郷難忘
昭和三十一年十月一日初版発行
発行者　芦屋市山本耀義
発行所　芦屋市内

○帰去來

昭和三十三年九月三十日初版発行

発行者　西宮市鳴尾町山本耀義

発行所　西宮市内

○呻吟集

昭和三十五年一月二十八日発行

発行者　畠輝暁

発行所　東京都大田区　平和の世界社

先生の「あとがき」は昭和三十四年十二月七日、東京青山居、八十二盲翁　中根貞彦となっている。

○黄躑躅

昭和三十五年七月二十五日発行

発行者　畠輝暁

発行所　東京都　平和の世界社

昭和三十五年五月附、盲翁八十三とした中根先生の後記に、熱海静養一ケ月間に和歌二百六十首　入院三ケ月間の作品七百二首の中から、三百余首を選んでこの歌集としたとある。

○目に泌む故郷

昭和三十七年九月十五日発行

発行者　畠輝暁

発行所　平和の世界社

あとがきは、昭和三十七年九月十五日となっている。先生は昭和三十三年の夏、突然右眼の失明を来し、治療中、翌年三月末、左眼もまた白内障にて全盲となり、爾来二年余の間に胆嚢炎、黄胆にかかり、日赤病院に入院したため、意を決して、日赤退院後、眼科の権威者庄司博士の医院に入院二回、手術の結果両眼開明の喜びを満喫することができ、三十六年の新春を迎え、一家を挙げて帰郷、その記念のために『目に泌む故郷』を作ったと記されている。

著者中根貞彦先生の略歴は巻末に次のように紹介されている。

中根貞彦氏は、父戦死の後、明治十一年二月四日、臼杵市の片切家に生れ、三歳にして母を失い、小学校卒業とともに、佐伯市中根家の養子となった。東大政治学科を出て日本銀行に入り、ロンドン代理店監督役、国庫局長を経て、大阪支店長になり、理事を兼ねた。本店帰任直後、三十四、山口及鴻池三行合併の議起り、本行の援助を請われたるを以てこの合併の議にあずかり、現在の

三和銀行創立せらるゝや、その主宰者の人選は日銀総裁の裁量に一任したるも適当の人物を得ず、強いて三行に迎えられ、敢て頭取の重任を負う。在任十二年、昭和廿年十一月引退。その後特殊会社整理委員会委員長の内命を受け準備中、昭和廿一年三月貴族院議員に勅選。歌集『膺懲』のため追放となり辞職。昭和廿六年解除。現在三和銀行相談役、高島屋顧問、ダイハツ工業監査役、ボーソー油脂取締役などの役員。著書に『耳』『帰路』『ふるさとの旅』『臼杵隊』『消えゆく灯』『松のもみぢ』『花散る島』『翠菊』『一動一静』『膺懲』など、戦後には『親』『花吹雪』『矢野竜渓』『伊予』『丹濃艶』『故郷難忘』外、随筆『風鈴』等がある。

歌は私のような初心者が読んでも、おゝらかで、精神力のたくましさ、豊かさが感じられ、「歌は人なり」といったことが如実にうかがえて頭の下がる思いがする。巻を開いて、眼に入った歌をしたためると、

小雨ふるふるさとの野は麦熟れて心明るくわがかへり來し

移ろふも憂しとうたひし故郷の城山松のいろいよよ濃き

いにしへに陶淵明は故郷に帰去來とうたひけらずやほろ酔の歌人ひとりをどり出でわがため踊るその手振はも

見えもせぬ眼を輝かし大洋に向ひてわれは年を迎へし

百寿までの十八年をいかに生きぬ呼吸するのみの身となるなかれ

受贈図書（二）

地域民族研究　創刊号	地域民族研究会	
落穂　二五号	大分大南地区文化財同好会	
ふるさと歴史考	南海新報社	(1)
大神一族と佐伯氏	〃	(2)
柵牟礼城風雲録	〃	(3)
ふるさとのむかし昔	安部弥右衛門	
御詠歌和讃其の他	〃	
俳人長野馬貞	梅木幸吉	
大分だより	大分県職業安定課	
空港景観の設計	梓設計清田文永	